

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19520341

研究課題名 (和文) 比較構文に関する統語的研究

研究課題名 (英文) On the Syntax of Comparative Deletions in Japanese

研究代表者

宮本 陽一 (MIYAMOTO YOICHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：50301271

研究成果の概要：本研究では、日本語の比較構文に生起する「より節」が目的語の数量を比較対象にする場合に、「かき混ぜ規則 (scrambling)」、「数量詞上昇 (Quantifier Raising)」等によって、生成された位置とは異なった位置に移動できることを明らかにした。これは、付加詞からの移動が常に排除されるわけではないことを意味している。この結果から、付加詞（特に二次述語）であっても主節と（素性照合によって）関係を結べる場合には抜き出しが許されることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：生成文法、比較構文、付加詞条件

1. 研究開始当初の背景

(1) 顕在的な疑問詞移動がないと考えられている日本語においても、Kikuchi (1987)が比較構文の「より (も)」の節内において空演算子の移動が関与していることを明らかにした。

(2) 更に、Ishii (1991)は、一時的特性を表わす述語 (stage-level predicates) と個体的特性を表わす述語 (individual-level predicates) の差異、数量比較の対象が主語である場合と目的語である場合の差異等、比較構文に現れる空演算子と浮遊数量詞との振る舞いの並行

性を指摘し、日本語の比較構文に現れる空演算子は浮遊数量詞であると結論付けた。

(3) しかしながら、Miyamoto (2004)は、浮遊数量詞の許されない統語的環境においてもこの空演算子が生成されうることを明らかにしている。よって、日本語の比較構文における空演算子が常に浮遊数量詞であると結論付けることはできない。

では、日本語の比較構文において現れる空演算子は、構造上どの位置に生成されることが可能で、どのような性質を持つのであろう

か。本研究においては、Kikuchi (1987)及びIshii (1991)の再検討を含め、日本語の比較構文の再分析を行う。ここから得られた結果をもとに、他言語との比較を通して、理論的貢献を目的とする。

2. 研究の目的

(1) 日本語比較構文の先行研究（特にKikuchi 1989, Ishii 1991）の研究成果を再検討し、先行研究では明らかにされなかった日本語の比較構文の特性を明らかにする。

(2) 上記の研究成果を他言語、特に英語の比較構文ならびに関連する構文と比較し、比較統語論の立場から自然言語における比較構文の相違を明らかにする。また、自然言語の移動現象に関する特性を他言語との比較を通して、更に明確にする。

(3) 上記(1)/(2)の研究成果を生成文法、特にミニマリストプログラムの枠組みにおいて理論的な説明を試みると同時に、言語理論一般に対する帰結を求める。

3. 研究の方法

「個別言語の記述」、「比較対照研究」、「理論的研究」と進める。

(1) 「個別言語の記述」

日本語の比較構文に関する検討項目としては、以下の①-③を含む。これらの特徴を浮遊数量詞との並行性から導き出すことができないことは、Miyamoto (2004)からすでに明らかである。これらの特徴を浮遊数量詞との並行性から導き出すことが出来ないことは、Miyamoto (2004)からすでに明らかである。

- ① 一時的特性を表わす述語と個体的特性を表わす述語の差異 (Ishii 1991, Tateishi 1989)
- ② Theme を目的語にとる述語と Non-theme を目的語にとる述語の差異 (Ishii 1991, Miyagawa 1989, Ueda 1986)
- ③ Unaccusative と Accusative の差異 (Ishii 1991, Miyagawa 1989)

(2) 「比較対照研究」

(1)で挙げた、日本語の比較構文で見られる3つの差異は、英語の比較構文では観察されない。この日英語の差異を含め、諸言語における関連構文との比較を行う。

(3) 「理論的研究」

(1)/(2)の過程を経て得られた成果を、更に言語理論一般、特にミニマリストプログラムの

枠組みにおいて理論的な説明を試みると同時に、言語理論一般に対する帰結を求める。

データ収集に関しては、2007 年度、2008 年度ともに先行研究におけるデータ及び母語話者の文法性判断による。

4. 研究成果

(1) 「個別言語（日本語）の記述」

① 空演算子の位置

日本語の比較構文に關与する空演算子は、Miyamoto (2004)において浮遊数量詞が許されない位置にも生成されうることが明らかにされた。更に、この空演算子の位置は主要部に先行する修飾語句の位置であると示唆された。つまり、比較構文における空演算子は、(i)に示した位置に生成されうるのである。

(i) [NP Op N]

ここで、日本語では名詞句内からの修飾語句の移動が不可能である点に注目してもらいたい。たとえば、(ii)は非文である。

(ii) *[安い]_i 太郎が昨日[NP t_i 花]を買った。

(i)と(ii)の差異は、移動する要素が頭在的であるか、非頭在的であるかによって区別できる。いわゆる左枝条件がPFの現象であるならば、これは驚くことではない(Merchant 2001)。

② 数量比較対象が主語の場合

日本語の比較構文では、「より節」が主語を修飾する浮遊数量詞「たくさん」、「大勢」等に付加した場合、容認度が下がる。たとえば、(i)よりも(ii)は受け入れがたい。

(i) [[本を買ったよりも] 大勢]の学生が CD を買った。

(ii) ??学生が [[本を買ったよりも] 大勢] CD を買った。

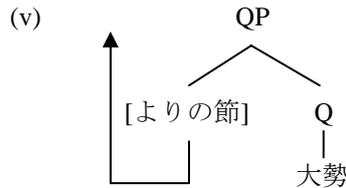
Ishii (1991)は、(ii)の非文法性は浮遊数量詞が主語を修飾した際に見られる非文法性と同一現象だとしている。

(iii) 学生が CD を 3 枚買った。

(iv) ??学生が 3 人 CD を買った。

しかしながら、Miyamoto (2004)が指摘しているように、比較構文と浮遊数量詞を含む文では常に並行性が見られるわけではない。よって、Ishii (1991)の分析は十分であるとは言えない。

本研究では、(ii)の非文法性は、Heim (2000), Larson (1988), von Stechow (1984)で提唱されている、「than 節」の LF における上昇同様、「より節」が LF において TP に上昇することによって説明されることを明らかにした。この「より節」の上昇により、(i)および(ii)では、LF において [本を買ったよりも] が TP に付加されることになる。この移動の際、「より節」は (v) に示すように付加詞 QP から抜き出される。この QP からの移動がいわゆる付加詞条件に違反すると考えられる。



この分析は、また、(i)が容認される事実も正しく予測してくれる。この例文では、(v)の構造が左枝に位置している。Miyamoto (2004)が示唆しているように、非頭在的な移動の場合には左枝条件の効果が見られないとすると、(i)においては「より節」の上昇は問題にはならないのである。

③ 数量比較対象が目的語の場合
比較対象が主語の場合と異なり、比較対象が目的語の場合は QP の位置による文法性の差は見られない。

- (i) 太郎は、[[花子買ったよりも]多く]の本を買った。
- (ii) 太郎は、本を [[花子買ったよりも]多く] 買った。

LF における「より節」上昇の分析を仮定すると、(i)ならびに(ii)においても[花子買ったよりも]が TP に付加されることになる。この2文が共に文法的であるという事実は、数量比較対象が目的語の場合は、「より節」の移動に問題がないことを意味している。

ここで、Miyagawa (1989)ならびに Ueda (1986)が主張しているように浮遊数量詞が二次述語であると仮定すると、「買う」という動詞が浮遊数量詞「多く」を結果述語、つまり項としてとっている可能性が考えられる。ところが、結果述語をとることが許されない動詞を使って再度確認してみると、これは正しくないことが分かる。

- (iii) 太郎は、[[花子が誉めたよりも]多く]の学生を誉めた。

- (iv) ??太郎は、学生を[[花子が誉めたよりも]多く] 誉めた。

Ishii (1991)においては、(iv)に類似した例文において「多く」を用いて、浮遊数量詞との並行性を指摘している。

- (v) 先生が CD を 3 枚買った。
- (vi) ??先生が学生を 3 人誉めた。

しかしながら、「多く」の代わりに「大勢」を用い、程度の比較に関する解釈の可能性を排除すると(vii)と(viii)の間に文法性の差は感じられない。

- (vii) 太郎は、[[花子が誉めたよりも]大勢]の学生を誉めた。
- (viii) 太郎は、学生を[[花子が誉めたよりも]大勢] 誉めた。

よって、主語を修飾する浮遊数量詞の場合と異なり、目的語を修飾する浮遊数量詞の場合は、「より節」が LF において付加詞である QP から上昇できるのである。

Unaccusative の場合も、主語は動詞の補部に基底生成されるので、LF における「より節」の上昇に関しても目的語と同じ振る舞いをする。

- (ix) [[昨日着いたよりも] 大勢]の学生が今朝着いた。
- (x) 学生が [[昨日着いたよりも] 大勢] 今朝着いた。

④ 「より節」の頭在的な移動
「より節」の上昇に関する主語と目的語の差は、頭在的な移動の際にも確認できる。

まず、「より節」と数量詞が属格を伴う名詞句内に生成された場合から整理する。

- (i) ?*[_{TP}[本を買ったよりも]_i [_{TP}昨日 [_{TP}[t_i 大勢]の学生が CD を買った]]]
- (ii) ??[_{TP}[花子が誉めたよりも]_i [_{TP} 太郎は [t_i 多く]の学生を誉めた]]]
- (iii) ??[_{TP}[昨日着いたよりも]_i [_{TP} 今朝 [_{TP}[t_i 大勢]の学生が着いた]]]

名詞句内からの修飾語句の頭在的な移動は許されないため、この3文は排除される。

次に浮遊数量詞の場合である。

- (iv) *[_{TP}[本を買ったよりも]_I [_{TP} 昨日
[_{TP} 学生が [_{t₁} 大勢] CD を買った]]].
- (v) [_{TP}[花子が誉めたよりも]_I [_{TP} 太郎は
学生を[_{t₁} 大勢] 誉めた]].
- (vi) [_{TP}[昨日着いたよりも]_I [_{TP} 今朝
[_{TP} 学生が [_{t₁} 大勢]着いた]].

LFにおける「より節」の上昇で見られた「主語と目的語の差」は、かき混ぜ操作 (scrambling) においても存在するのである。

ここでの「主語と目的語の差」は、現存する付加詞条件の効果に関する仮説では説明することが難しい (e.g., Huang 1982; Chomsky 1995)。というのも、付加詞であれば、抜き出しを一律に禁ずるのが付加詞条件だからである。

「比較対照研究」に移る前に、ここで扱っている浮遊数量詞が目的語を修飾する場合にも付加詞の特徴を持っていることを確認しておく。まず、(vii)に示したように、「より節+浮遊数量詞」は長距離移動が可能である。

- (vii) [_{TP}[_{QP}[花子が誉めたよりも] 大勢]_I
[_{TP} 次郎は [_{CP} [_{TP} 太郎が学生を _{t₁} 誉めた]と]言った]].

しかし、島を伴う統語環境においては長距離の移動が許されない。たとえば、複合名詞句、WH 島からの QP 全体の移動は容認度が著しく下がる。

- (viii) ?*[_{TP}[_{QP}[花子が誉めたよりも] 大勢]_I
[_{TP} 次郎は [_{NP}[_{CP}[_{TP} 太郎が学生を _{t₁} 誉めた]という] うわさ]を聞いた]].
- (ix) ???[_{TP}[_{QP}[花子が誉めたよりも] 大勢]_I
[_{TP} 次郎は [_{CP} [_{TP} 太郎が学生を _{t₁} 誉めた]かどうか]尋ねた]].

ここでの容認度は、いわゆる項の島からの移動とは大きく異なる。

- (x) ??[_{TP}[_{NP} チョムスキーの本を]_I [_{TP} 次郎は
[_{NP}[_{CP} [_{TP} 太郎が _{t₁} 訳した]という]
うわさ]を聞いた]].
- (xi) ?[_{TP}[_{NP} チョムスキーの本を]_I [_{TP} 次郎は
花子に [_{CP} [_{TP} 太郎が _{t₁} 買う]かどうか]
尋ねた]].

「より節+浮遊数量詞」の QP は、むしろ付

加詞を島から移動させた場合と並行性を示す。

- (xii) ???[_{TP}[_{PP} トンカチで]_I [_{TP} 次郎は [_{NP}[_{CP}
[_{TP} 太郎が _{t₁} 車を直した]という]
うわさ]を聞いた]].
- (xiii) ???[_{TP}[_{PP} トンカチで]_I [_{TP} 次郎は 花子に
[_{CP} [_{TP} 太郎が _{t₁} 車を直す]かどうか]
尋ねた]].

ここで、QP 全体を島から移動させた際の容認度の低さは、浮遊数量詞自体が付加詞の特徴を持つとすれば驚くべきことではない。

日本語の比較構文における「より節」ならびに「より節+浮遊数量詞」の移動は、付加詞条件の効果に関して新たな知見を与えるものである。単純に項と項でない要素を区別するだけでは、浮遊数量詞から「より節」を抜き出せる事実は説明できないのである。

(2) 「比較対照研究」

「個別言語 (日本語) の記述」から、付加詞からの抜き出しが許される場合があることがわかった。ここで他言語に注目してみると、同様の現象が観察されている。英語では、Borgonovo and Neeleman (2000)によって、日本語の比較構文よりも限られた環境ではあるが、やはり二次述語からの移動が可能であることが示されている。また、Demonte (1988)が、スペイン語においても日本語の比較構文の場合と同様に、二次述語が目的語もしくは Unaccusative の主語を修飾する場合には抜き出しが許されることを指摘している。

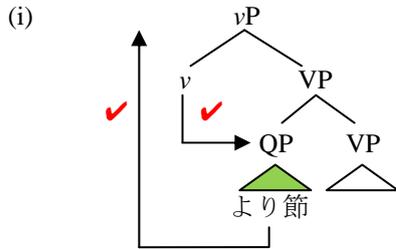
まず、日本語の浮遊数量詞からの移動がスペイン語の二次述語からの移動と並行性を示すという事実は、日本語の浮遊数量詞が二次述語である、更なる証拠であると考えることができる。これは、Miyagawa (1989)ならびに Ueda (1986)の主張を支持するものである。

ここでは Borgonovo and Neeleman と Demonte の分析の詳細には立ち入らないが、基本的に抜き出しが可能な場合は二次述語が項として機能しているという仮定に基づいて分析を行っている。たとえば、Demonte (1988)は、二次述語が動詞の項位置に移動するため、抜き出しが可能になると主張している。ところが、日本語の比較構文で用いられている QP が付加詞の特徴を持つとすると、この Demonte の分析をそのまま日本語の比較構文の場合に当てはめるわけにはいかない。

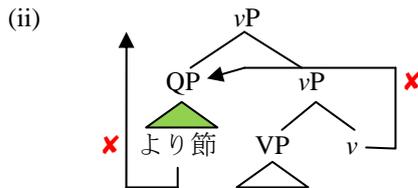
(3) 「理論的研究」

本研究では、ミニマリストプログラム

(Chomsky 1995, 2000, 2001, 2004, 2008) の枠組みにおいていわゆる付加詞の特徴を示す要素であっても、主節と素性照合を起こす必要がある場合には、抜き出しが可能になることを明らかにした (Stepanov 2001, 2007)。目的語を修飾する二次述語・浮遊数量詞の場合は、(i)に示すように相 (Aspect) に関して主節の *v* と素性照合 (feature-checking) が起こるため抜き出しが可能になるのである。



これに対し、主語を修飾する二次述語の場合は、*vP* に付加されるため、*v* の C 統御 (c-command) の領域から逸脱している。よって、相に関する素性照合は不可能である。よって、抜き出しは許されないのである。



本研究では、日本語の比較構文の再検討を通して、当該構文の、移動に関する新たな特徴を明らかにし、ミニマリストプログラムの枠組みにおいて分析を試みた。Huang (1982) で指摘されている抽出領域条件 (Condition on Extraction Domain) に関する区別は、素性照合の有無によって区別されるべきなのである。ここでの分析は、Boeckx (2008) が指摘しているように、素性照合が普遍文法 (Universal Grammar) における重要な統語的な装置であることを意味している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① Miyamoto Yoichi, A Speculative Note on the Structure of Half-Relatives, 大阪大学言語文化研究科研究プロジェクト 2008 自然言語への理論的アプローチ, pp.1-8, 05/2009, 査読無
- ② Miyamoto Yoichi, On the Theme/Non-theme

Contrast in Japanese Comparative Deletion, 大阪大学言語文化研究科研究プロジェクト 2007 自然言語への理論的アプローチ, pp.49-56, 05/2008, 査読無

[学会発表] (計 4 件)

- ① Miyamoto Yoichi, On Ways of Measurement and Structure of NP, 南山比較統語論国際共同研究プロジェクト 第一回ワークショップ, 南山大学. (11/23/2008)
- ② Miyamoto Yoichi, On Extraction out of a Floating Quantifier in Japanese, Ways of Structure Building, University of Basque Country, Vitoria, Spain. (11/13/2008)
- ③ Miyamoto Yoichi, On the Comparative Operator in Japanese, 第25回言語学研究センターコロキウム, 南山大学. (07/19/2008)
- ④ Miyamoto Yoichi, On Stage-level and Individual-level Distinction in Small Clause Subjects, 日本英文学会関西支部第2回大会ワークショップ, 大阪大学. (12/22/2007)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 陽一 (MIYAMOTO YOICHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号: 50301271

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし